大明宮北半部と平城宮松林苑

今井晃樹

Ⅰ　はじめに

筆者はかつて、平城宮は唐長安城の大明宮を参考に造営されたという趣旨の報告をおこなった。そのなかで、平城宮の北に位置する松林苑は、大明宮北半部をもとに造られたのではないかという説を提示した[1]。その根拠として２つの区画の類似点を取り上げた。

・宮の北に位置（図１）
・形も大きさも類似
・皇帝あるいは天皇の私的空間
・大明宮麟徳殿と内郭（松林宮）の位置が類似
・大明宮太液池と松林苑水上池の大きさが近似

従来、松林苑は唐長安城の北に広がる皇帝の禁苑にあたるとされ、現在でも有力な説である。河上邦彦によれば、松林苑は中国の禁苑に相当するとし、大明宮北半部と松林苑は直接比較できないと述べている[2]。金子裕之は、唐長安城太極宮の北に位置する西内苑にならったのが松林苑である、という意見である[3]。しかし、唐代の禁苑は南北約12㎞、東

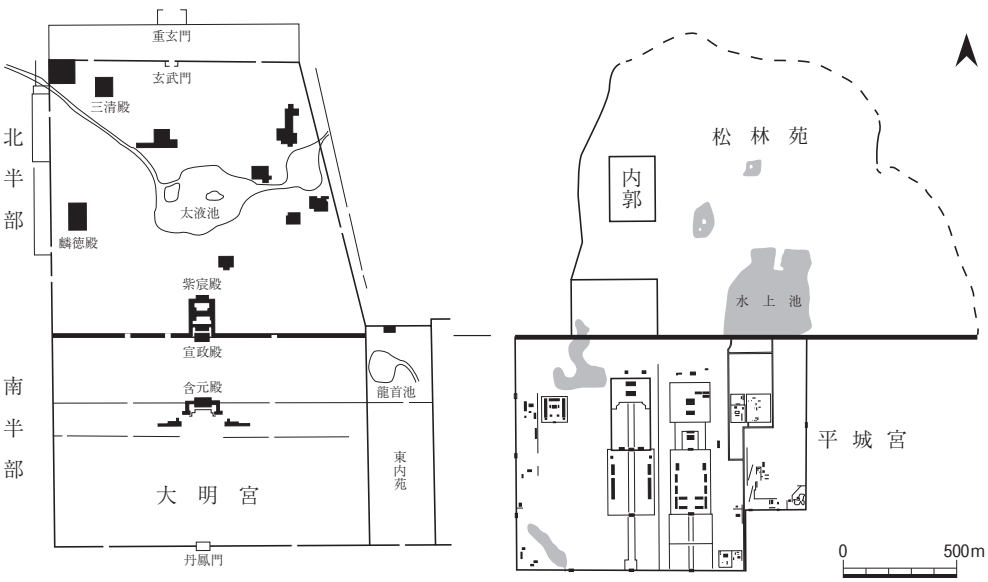


図１　大明宮と平城宮・松林苑の平面形比較

西約14kmと巨大であること、西内苑より大明宮北半部の方が松林苑との共通点が多いことから、過去の２説とは異なる上記の私説を提示した。発表当時は紙幅の制限もあり、その論拠を十分に説明できなかったので、以下では、大明宮北半部と松林苑の概要を述べた上で、改めて私説の論拠を示してみたい。

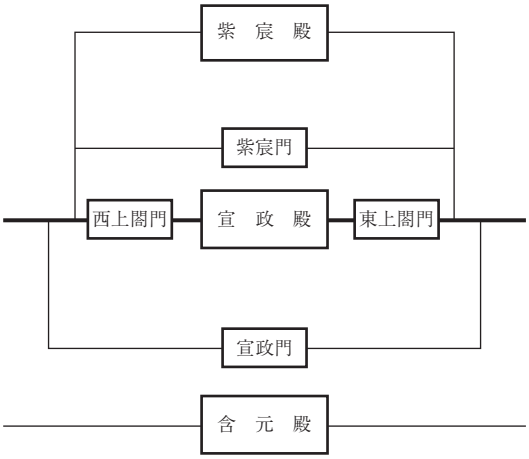


図２　東西上閤門の位置概念図

Ⅱ　大明宮北半部の様相

１　大 明 宮

大明宮は、唐の太宗が父高祖（李淵）の避暑宮殿を造営するため、貞観８年（634）10月に永安宮の造営を開始、翌９年正月に大明宮と改名したが、同年５月に高祖が死亡したため造営は中止となった。高宗は病弱で蒸し暑い太極宮を避けるため、龍朔２年（662）に旧大明宮を改修して蓬莱宮とし、中枢部は翌３年４月に完成した[4]。その後、玄宗開元元年（713）の大規模補修、憲宗元和12年（817）に蓬莱池周囲に400間の回廊を新造するなどの記録がある[5]。発掘調査によると、大明宮の規模は南北約2.3km、東西約1.4km（東内苑を除く）である[6]（図１左）。

２　紫 宸 殿

大明宮の南北中軸線上には、南から丹鳳門、含元殿（外朝）、宣政殿（中朝）、紫宸殿（内朝）が並ぶ（図１左）。内朝正殿である紫宸殿は上閤門内にあり、平城宮の内裏正殿に相当するといえよう。朝政は通常、宣政殿で行われるため、官僚たちは紫宸殿に入ることはない。皇帝の許可があって紫宸殿に至るときに、官僚たちは宣政殿の東西にある上閤門より入る（図２）。これを入閤という[7]。上閤門の東西外側には塀があり、大明宮を南北に二分する重要な区画施設となっている。したがって、上閤門がある塀の南（南半部）は、皇帝の儀式や日常の政務をおこない官庁がならび立つ政務空間、塀の北（北半部）は紫宸殿を中心とし、その北方に苑池や内道場が複数存在する皇帝の私的空間となる。北半部の規模は、南北約1.2km、東西は北壁で約1.1km、南壁は約1.4kmである（図１左）。

3　麟徳殿

建物の規模と構造　大明宮北半部の西寄りに位置する宮内最大の建築群である。殿名は高宗の麟徳年間（664－665）の創建に由来する。建物は前中後三殿構成であるゆえに三殿とも呼ばれた。東西には二楼二亭が付属し、その周囲には回廊が巡る[8]（図３）。回廊の外側には殿全体を囲む版築の塀があり、その規模は南北約170m、東西約120mを測る。

三殿の基壇全体は二重で南北約130m、東西約78m、高さは2.5mある。主殿である中殿は、桁行９間、梁行５間、周囲には厚い壁があり、床面には表面を磨いた切石を敷き詰めていた。前殿は桁行９間、梁行４間で、中殿と同様に切石敷である。後殿は、桁行９間、

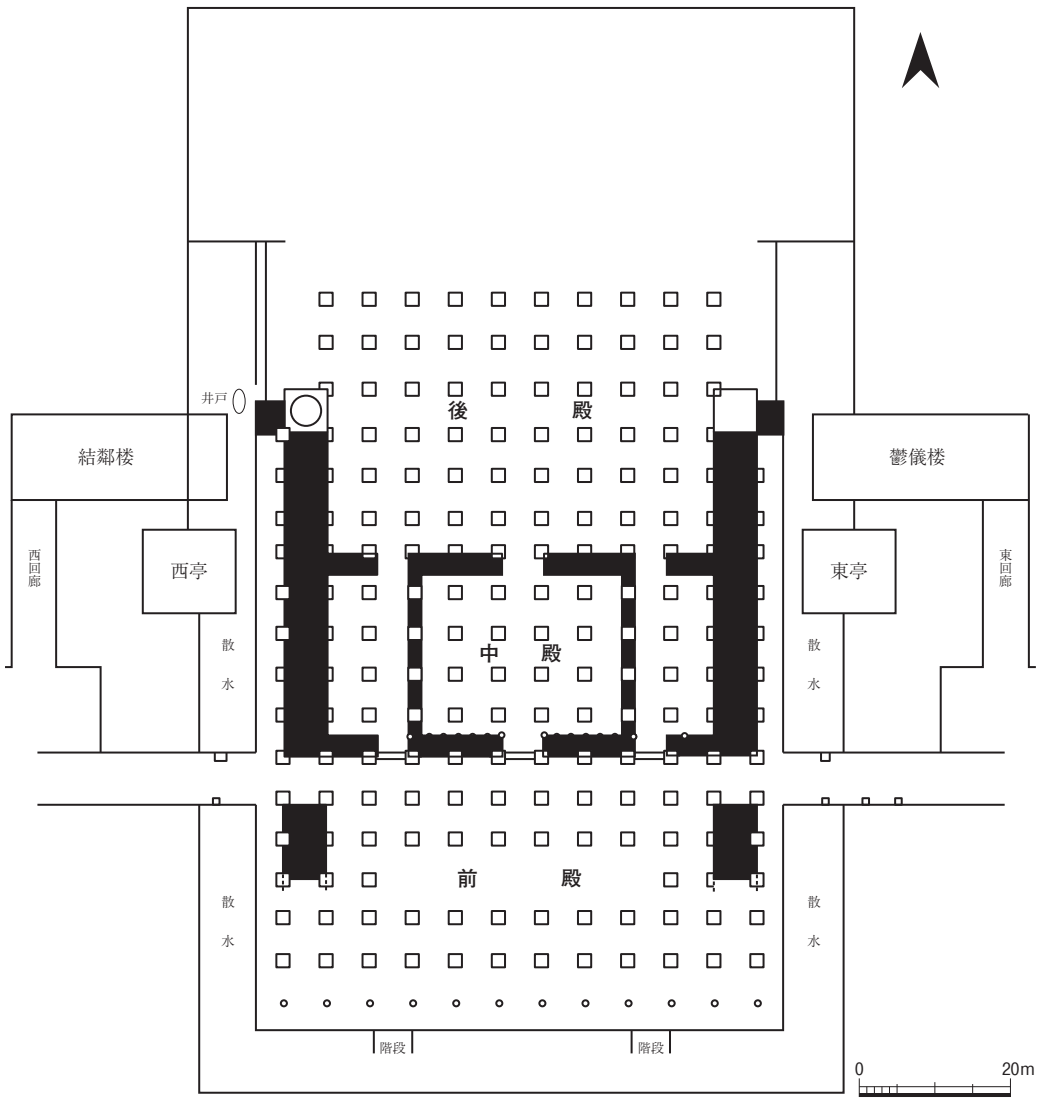


図３　麟徳殿遺構平面図（黒の塗りつぶしは壁）

梁行６間で、床面は無文の磚敷であった。麟徳殿の基壇面積は約5,000㎡となり、北京にある清故宮太和殿の３倍の面積に相当する。麟徳殿内庭部は、東西約120m、南北約50mの規模である[9]。

賞賜・設宴　麟徳殿の機能について文献史料による研究からまとめてみたい[10]。麟徳殿でおこなわれた賞賜・設宴の事績が多く記録されている。これらの記録はとくに粛宗以降の唐代後半に多いが、これは高宗や則天武后が洛陽、玄宗は興慶宮に滞在することが多かったことが原因の一つと考えられる。

国内の貴族・官僚を賞賜・接待するために宴会を催すが、賜物は品階により差があった。賞賜・設宴は節会に因むことが多く、二月二日の寒食節、九月九日の重陽節、皇帝誕生節が目立つ。設宴に際して、舞楽、百戯、撃鞠あるいは馬球（ポロ）、角抵（相撲）が催されることも多々あった。また、皇帝とともに詩を読むこともおこなわれたようである。

外交でも同様に賞賜・設宴がおこなわれた。設宴は殿内、舞楽や百儀などは内庭でおこなわれたのであろう。大宝度の遣唐使である粟田真人らが、則天武后の招宴によって麟徳殿に参殿した[11]。彼らは麟徳殿の威容や太液池ほか、諸々の宮殿などをつぶさに目にしたことであろう。こうした設宴は、ときに3500人も参加したという[12]。一度に大勢の人々が参加するためには、巨大な建物群である麟徳殿がふさわしい場所であったのであろう。

宗教活動　賞賜・設宴のほかに、儒仏道三教の講論が麟徳殿で実施された記録もある。これらは皇帝の誕生日に催されることが多く、粛宗の時代に開始されたようだ[13]。これは、皇帝個人の宗教施設である内道場の存在をも示唆している。

4　太液池

大明宮北半部の中央に位置する大きな池であり、西池と東池からなる（図１左）。池は含元殿、宣政殿、紫宸殿が建つ高台（龍首原）の北に位置する窪地に造成された。別名蓬莱池とも呼ばれ、池の周囲には多くの宮殿があった。太液池の大要は1957年のボーリング調査で把握されていたが[14]、1998年に改めて詳細なボーリング調査を実施した。その結果、池の東西は484m、南北は310mであることが判明し、池中央に現存する蓬莱島のほかに、池の西北寄りにもう一つの島を発見した[15]。これを受けて、奈良文化財研究所は太液池の実態解明を目的とした共同調査研究を計画し、中国社会科学院考古研究所とともに2001年から2005年にかけて都合５次にわたる発掘調査を実施した（図４）。本論の主旨とはやや離れるが、発掘調査の概略を以下に紹介したい。

発掘調査の概要　2002年には、池の西岸および西北部分の調査を実施した[16]。西岸は地山に多くの木杭を打ち込み、割れた瓦磚を敷き詰めた上で、幅70m、厚さ２mにも及ぶ版築の岸を構築している。池内には護岸の杭列が検出され、池岸上には幅15～25mの路面があ

り車の轍などがみられた。また、池から離れた場所では、井戸や貯水池、建物跡などがみつかっている。西北の調査では、池に流入する導水路がみつかった。幅は３～８ｍあり、水路内には杭列がみられ、池の入水部付近には水量を調整するための磚積の施設が複数みつかった。また、池岸より離れた位置には建物や塀がいくつか存在した。

2003年は、蓬莱島の南岸と池西北に位置する新島の北岸を調査した[17]。蓬莱島南岸では、島から池へ直線的に張り出す道路があり版築で造成されていた。道路の両脇には、小規模の貯水池があり磚積や磚と自然石を組み合わせた護岸施設がみられた。また、東屋風建物（亭）の礎石や、景石とみられる遺構も確認した。新島の調査では、島と池北岸の間に水上建物の遺構が発見されたが、類例のない遺構であり上部構造の復元やその建物の機能に今後の研究の進展が待たれる。

2004年は池南岸の平坦地を調査した[18]。調査区は、大明宮の南北中軸線上に位置し、文献にみられる池南岸の重要建物の調査を目的とした。結果、回廊と塀によって区画された複数棟の建物と中庭の遺構がみつかった。多数の礎石、彩色が残る壁材の破片のほか、象

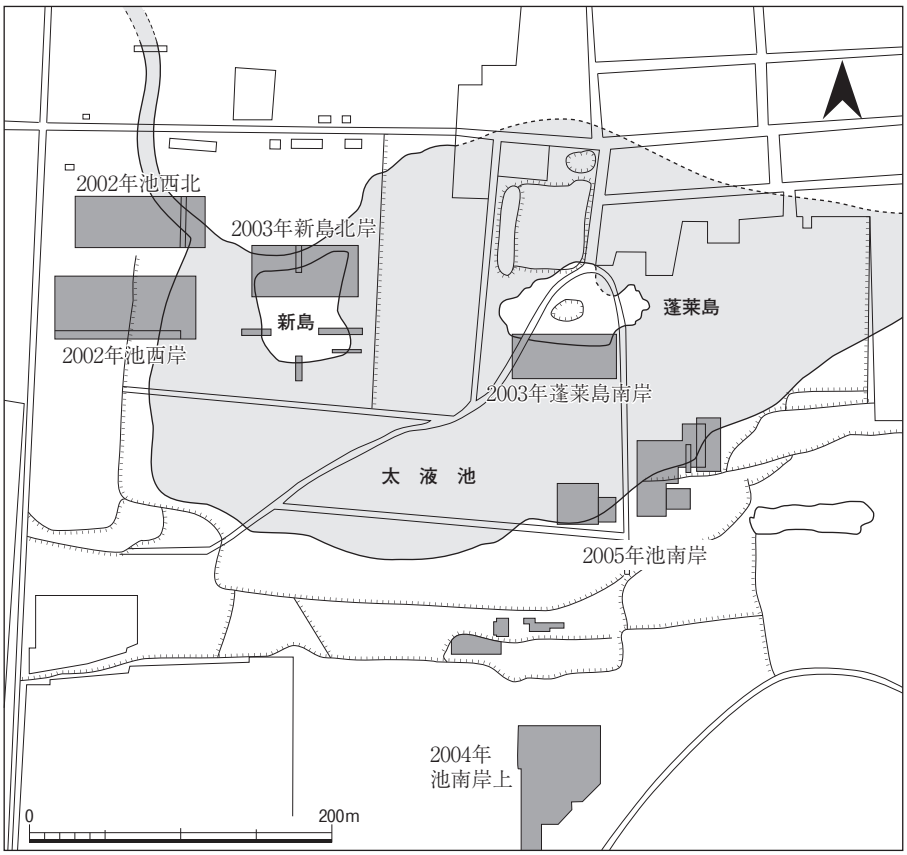


図４　太液池の発掘調査区位置図

の石彫刻や石灯籠が出土し、仏教関連の建物があったと推測される。

2005年は、池の東南部の調査をおこなった[19]。南岸は曲線的に入り組む形状をしており、池内には木杭による桟橋状あるいは廊状の建物がみつかった。また、東の調査区では、池岸上から池内にかけて、穴の底に乱杭を打ち込み地盤沈下防止措置を施した礎石据付穴が多数みつかり、周囲には礎石や石製欄干の破片が散乱していた[20]。この建物は、池に張り出す釣殿であったと考えている。池底の堆積層からは貝殻やハスの葉や茎、花托の痕跡が多くみられた。

このように、数次にわたる発掘調査により、池岸の具体像にあきらかになり、皇帝苑池の重要な発掘事例を学界に提示できた意義は大きい。以下、文献資料から知られる太液池周辺の様相を概述してみたい。

水源　太液池の導水路は発掘調査であきらかになったが、その水源については不明である。清の徐松『唐両京城坊考』によれば、長安城の東を流れる滻水から分流した龍首渠東渠は長安城の東側を北流し、大明宮の東に付属する東内苑の龍首池に入る。その後、西流し大明宮の下馬橋の下を通る、とある[21]。史念海は、下馬橋の下を通る水は大明宮の西に臨接する西内苑を北流し、東へ折れて太液池に流入する、と考える[22]。ボーリング調査を実施した発掘隊は、地形からみて龍首原の南から高台を抜けて窪地にある太液池に流れ込むとは考えられないとして、池西北にある禁苑内の別の水源を想定している[23]。

建物　北宋の宋敏求『長安志』や『唐両京城坊考』によると、紫宸殿の北に蓬萊殿があり、蓬萊殿の北に含涼殿、含涼殿の北に太液池があった。清暉閣と綾綺殿は蓬萊殿の西にあった（『長安志』巻６）。蓬萊池の周囲に四百間の回廊を造営した（『旧唐書』憲宗紀）。このほか、『長安志』や『唐両京城坊考』には、大明宮北半部に存在した多数の宮殿名が列記されている。太液池の蓬萊島には、太液亭とよばれる小規模な建物があった。穆宗は太液亭で大臣に『詩経』や『書経』の講義をさせた（『旧唐書』穆宗紀）。文宗は太液亭に古代君臣の事績の絵をかかせて観覧した（『旧唐書』文宗紀）。宣宗が崔元略を太液亭に招いて宴をひらいた（『旧唐書』宣宗紀）。当時は蓬萊島上にも建物があって歴史の舞台になっていたことがわかる。

風景　諸書には太液池周辺の風景が断片的に描写されている。玄宗が８月15日夜に楊貴妃と太液池に臨み満月を眺めていたが、不意に不快に思い侍従に「池の西岸に高さ100尺の高台を築き、妃と来年、満月を眺めることができるようにせよ」と命じた。しかし、のちに安史の乱が起こり、工事は中止され高台だけが残った（『開元天宝遺事』天宝下・望月臺）。太液池西岸の発掘調査では、この高台の痕跡はみられなかった。『宮殿儀』によると、太液池は大明宮含涼殿にあり、池の周囲は十数頃。池中に蓬萊山（島）があり、山上には珍しい草木があり、鳥や魚があつまる（『類編長安志』巻３）。太液池の池岸に竹が茂って

いた。玄宗が兄弟たちと竹藪を歩きながら兄弟に「親兄弟には生来、離心離意がある。皆も根っこでつながり、枝も密な竹を鏡とせよ」と語った（『開元天宝遺事』）。大暦８年（773）６月に、蓬莱池で捕まえた毛亀を百僚に示した（『冊府元亀』巻24符瑞３）。

太液池にさざ波が立って、暑さがゆるみ秋の気配が感じられる。そよ風が蓮の葉にあった露を池の中に転がしていった（王維「秋思」）。発掘調査で、池底の堆積土にハスの花托の痕跡が多数みられたことと一致する。池には三山があり、鳥が泳ぎまわり、橋がかかっていた（李紳「憶春日太液池亭候對」）。太液池の西北で発見した新島は蓬莱三山の一つと考えられる。以上、詩文は細かな描写ではあるが、池や周辺の風景が知られ、その一部が発掘調査でも確認された点は大きい。

宗教施設　先に麟徳殿で宗教行事が催された事例を紹介したが、このほかに大明宮北半部には皇帝個人の信仰のための内道場が複数存在した。三清殿は、道教の最高神格である玉清天の元始天尊、上清天の霊宝天尊（太上道君）、老子を神格化した太清天の道徳天尊（太上老君）の三柱神を祭る神殿である。発掘調査がなされ、基壇は南北73m、東西47m、高さは14mもあり、希少な単色の施釉瓦や三彩瓦が出土している[24]。三清殿の創建年代の記録はないが、おそらく玄宗時代の創建であろう。武宗は、仙人を呼び寄せる望仙台を建設した（『旧唐書』武宗紀）。望仙台の遺跡が紫宸殿の東側で発掘調査された。正方形の基壇は、一辺約30m、高さは9.7m残存していた。また、基壇の周囲には、幅約９m、深さ約1.5mの周壕が回字形に巡っていた[25]。大角観（玄元皇帝廟）は皇家の始祖である老子を祀る祖廟であり、高宗の時代に創建された。そのほか、玄英観、玉晨観など道観が多い[26]。

一方、明確な仏教寺院は明徳寺（『唐両京城坊考』）ぐらいと記録が少ない。明徳寺は『長安志』にある昭徳寺と同じ寺とみられている。しかし、発掘調査の概要で示したように、池南岸には象の石彫刻や石灯籠の破片が出土していることから、文献に記載のない仏教施設、仏教の内道場があった可能性は高い。

Ⅲ　松林苑の概要

１　松林苑とは

松林苑の確認は、昭和47年（1972）に奈良県立橿原考古学研究所が、瓢箪山古墳周壕を調査した折に奈良時代の瓦片が出土したこと、古墳の東側で土塁を見つけたことがきっかけとなった。その後、下記に示すように調査が進み、全体像があきらかになった。

２　発掘調査の成果

これまでの調査で松林苑を取り囲む築地塀のほか、建物、苑池などが見つかっている。

築地塀　松林苑の西辺を区画する築地塀は、基底幅３ｍ（10尺）で、幅20～50㎝の雨落溝がともなっていた。築地塀の両脇には多量の瓦片が堆積し、西辺築地塀では、軒丸瓦6284A（平城京瓦編年Ⅰ－１期、以下、期のみ標記）、軒丸瓦6311Bと軒平瓦6664D・F・G・N、6689A・B（以上Ⅱ－１期）、軒丸瓦6225Cと軒平瓦6694A（以上Ⅱ－２期）のほか、「東」のヘラ描きをもつ平瓦（Ⅱ－１期）が出土した[27]。瓦の時期からみると、築地塀の造営は還都前の天平年間（729～745）頃と考えるのが妥当であろう。

近年、松林苑の東辺を画する築地塀が発見された。場所はウワナベ古墳、コナベ古墳の北方で、24号バイパスの西側に位置する。築地塀と思われる土塁は幅約５ｍ、高さ0.8mほど残存し、周囲には瓦片が散布していた（図５）。これを根拠に考えると、松林苑の東辺築地塀はウワナベ越えの谷筋の西側に沿って構築されたと考えられる[28]。この成果から、

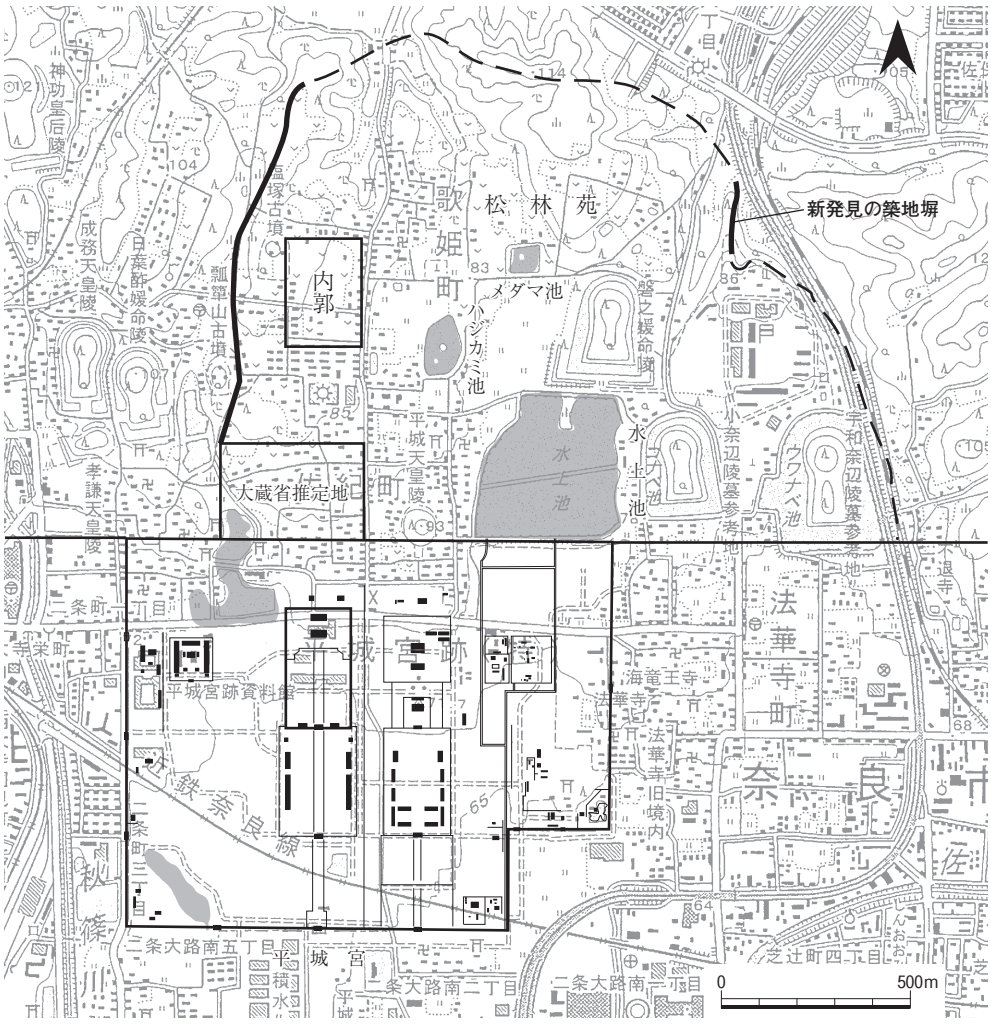


図５　平城宮と松林苑

松林苑の規模は南北約1.3㎞、東西約1.8㎞に復元されることとなった。ただし、これまでの調査で築地塀に開く門の痕跡は未発見である。

松林苑南辺の築地塀は、基底幅2.7m（９尺）と西辺築地塀より１尺小さい。その後の調査により、平城宮北面大垣と松林苑南辺築地塀の間には、築地塀に囲まれた東西に長い空間が存在したことが確認されており、大蔵省推定地とされている。その規模は南北240m、東西370mの規模であることが判明した[29]。大蔵省推定地の東辺築地塀は、松林苑南辺築地塀（大蔵省推定地北辺築地塀）と同様、基底幅は2.7mであり、幅80㎝から１mの雨落溝がともなっている。築地塀周辺から出土する軒瓦は、6225A－6663Cb（Ⅱ－２期）が主体で[30]、松林苑西辺築地塀や後述する内郭から出土する軒瓦よりは新しい。現在の年代観では、平城宮還都後に改修された第二次大極殿院や東区朝堂院と同時期と考えらえる。松林苑南辺築地塀では、「修」および「理」刻印の瓦も出土しており、奈良時代後半に築地塀瓦の補修があったことがうかがえる[31]。

内郭　土塁が一部残存する地点を南辺、および住民の証言による多量の瓦出土地点を西辺と想定し、地形図と照合すると、築地塀で囲まれた範囲は南北300m×東西200m、あるいは南北210m×東西200mほどになるという[32]。内郭内には２つの建物がみつかっている。中央では建物西北隅付近の雨落溝を検出し、南北棟建物と推定される。西寄りの建物は東西棟で、北・東・南面の雨落溝から南北約15m、東西は40m以上の規模をもつ基壇で桁行９間以上、梁行４間に復元できる。建物の南には舗装としての礫敷遺構が面的に広がっており、建物にともなう広場と考られる。こうした状況から、内郭は文献にある松林宮と推測されている。

内郭内から出土した軒瓦は、6281A・B、6284-6561A、6646D、6641C・F（以上Ⅰ-１期）、6311A、6313A（以上Ⅱ-１期）、6314A、6721C（以上Ⅱ-２期）、6316A・Da（以上Ⅲ-２期）など、時期に幅があるが、建物は平城遷都まもなくか、あるいは天平年間前後に建てられたと考えられる[33]。

苑池　古墳の周壕を利用して池に造り替えたところが複数個所確認されている。松林苑の西南隅には、現在も築山と苑池がのこる。これは前方後円墳である猫塚古墳の墳丘と周壕を利用した苑池で、壕のそばで掘立柱建物がみつかっている[34]。このほか、市庭古墳後円部の北西で周壕を利用した奈良時代の池の遺構がみつかった。外堤内側の葺石を埋め立てて傾斜を緩くした上に小礫を敷いて州浜としている。州浜は曲線的に出入りがあり、出島や中島の痕跡もみられた。池内から瓦が出土したことから、外堤の外側には建物があったことも推定される[35]。また、コナベ古墳の北東に位置する大和20号墳の周壕汀線の葺石を埋め立てて円礫を敷き詰めている。墳丘を築山と見立てた池と考えられている[36]。

現存する水上池は数度にわたる発掘調査により奈良時代に造営された池であることは疑

いない。池の南辺および東辺が、平城宮の北面大垣、東面大垣と一致することもその証左といえるだろう。近年の調査の結果、池北辺に現在ものこる半島は、当初は存在せず半島南端の小高い部分が島状になっていた可能性が指摘されている[37]。この池にかつて島が複数存在したことは、弘化４年（1847）の古文書であきらかである[38]。こうした目でみれば、同様に中島のあるハジカミ池、メダマ池なども、奈良時代に造営された池であったと考えるのが自然であろう。現に、メダマ池周辺やハジカミ池西方において瓦の散布地があることから[39]、池周辺に奈良時代の建物が存在する可能性は高いであろう。

3　史　　料

先学がすでに指摘しているとおり、松林苑に関する記事は『続日本紀』に記された聖武天皇の天平元年（729）から天平17年の間の計６件である[40]。以下に列挙する。

天平元年（729）３月３日：天皇御二松林苑一宴二群臣一。引二諸司并朝集使主典以上于御在所一。賜レ物有レ差。

天平元年（729）５月５日：天皇御二松林一。宴二王臣五位已上一賜レ禄有レ差。亦奉レ騎人等。不レ問二位品一給二銭一千文一。

天平２年（730）３月３日：天皇御二松林宮一宴二五位以上一。引二文章生等一令レ賦二曲水一。賜二絁布一有レ差。

天平７年（735）５月５日：天皇御二北松林一覧二騎射一。入唐廻使及唐人奏二唐国新羅楽一并レ槍。五位已上賜レ禄有レ差。

天平10年（738）正月17日：皇帝幸二松林一。賜二宴於文武官一主典已上賚レ禄有レ差。

天平17年（745）５月18日：天皇親臨二松林倉廩一賜二陪従人等穀一有レ差。

「松林苑」と記載があるのは１件のみで、そのほかは、「松林」、「松林宮」、「北松林」、「松林倉廩」と記録される。このうち５件は、１月17日（大射）、３月３日（曲水）、５月５日（騎射）の節日であり、賜宴、賜禄・賜物をおこなっている。松林苑での行事が、節会と節禄による天皇と臣下の関係を強くするための政治的、経済的意義を有していたことが認められよう[41]。一方、天平７年の記事では、帰国した遣唐使とともに唐人が参加しており、これは外国使節の接待が松林苑でおこなわれた貴重な記録といえる。また、節会に関わる５件の記事のうち、天皇が松林苑に出向く際に「御」と記すのが４件、「幸」とするのは１件である。宮内に出向く「御」が多いということは、松林苑は宮内であるという認識が強かったとも考えられる。これを松林苑が天皇の私的空間であったと考える根拠の一つとしたい。天平17年の記事に出てくる松林倉廩の場所は、松林苑の西南に位置する大蔵省推定地に比定されており、この場所に大蔵省の倉庫群もあったのではないかと想定されている[42]。天皇がここに出向くのに「親臨」とあるのは、この区画が松林苑でもなく宮内

でもない別の範疇なのかどうか興味のある点である。

Ⅳ　ま と め

以上、大明宮北半部および松林苑の様相を、発掘調査成果および文献資料の研究を参照し概観してきた。最後に両者の類似点を改めて整理し、今後の研究の方向性を示したい。

皇帝・天皇の私的空間　大明宮北半部が同南半部の政務空間とは異なる皇帝の私的空間であることは、皇帝が居住する紫宸殿が北半部の南端に位置すること、紫宸殿に入るには宣政殿の左右にある東西上閤門から入る必要があること、２つの上閤門の東西には大明宮を南北に区画する長大な塀が存在することからあきらかであろう。一方、松林苑は、平城宮北面築地大垣の北方に位置し、内裏区画とも隔絶している。しかし、天皇が松林苑に出向く際は、宮内と同様の「御」という表現を使用していること、松林苑内には天皇が節会、節禄以外の行事に関わる記録がないことから、天皇の私的空間と考えることができよう。

麟徳殿と内郭の位置　麟徳殿と内郭（松林宮）の位置が、それぞれ大明宮北半部、松林苑の西寄りの高台にあるというだけでなく、その規模も麟徳殿の区画が南北170m、東西120m、松林宮は南北300mあるいは210m、東西は200mと想定され、麟徳殿の区画よりもむしろ大きい。また、その機能についても通有するところが見受けられる。松林苑にみられる節会、節禄は、麟徳殿においても実施されていた。麟徳殿は、大明宮における賜宴専用ともいえるような場所であり、設宴の頻度は高宗以降、唐末に至るまで増加していく。賜宴のきっかけとして、高宗から睿宗までは外国使節の接待が目立つが、節会はやや遅れて玄宗以降に頻度は増えるようだ[43]。こうした時期的変遷はあるものの、８世紀代における麟徳殿の使用契機は、松林苑における記録と共通するといえよう。

以下、前稿では提示しなかった新たな共通点と今後の検討課題をのべてみたい。

城壁と築地塀　両者の共通点として大明宮北半部を囲む城壁と松林苑を囲む築地塀の存在に注目したい。松林苑の調査で確認されているのは西辺の築地および東辺のごく一部であるが、この状況から築地塀が松林苑全体を囲んでいたことは間違いない。基底部幅が３m（10尺）という規模は平城宮を囲む築地大垣の基底部幅2.7m（９尺）よりも大きい。『延喜式』の記載にもとづいて推算すると、瓦葺きの築地塀の高さは６m以上となる[44]。大明宮は高さ10mを超える城壁で囲まれていた[45]。また、大明宮北半部の北面、東面、西面にはそれぞれ城門が開いていた。松林苑の築地塀に城門があったかどうか、今後注目したいところである。

苑池と臨池建物　松林苑内には古墳の周壕を改修した苑池が多数存在したことが、調査の結果あきらかになっている。合わせて現存する水上池、ハジカミ池やメダマ池には島が

今も存在していることから、これらも奈良時代に造営された苑池であろう。大明宮北半部においては、いまのところ太液池の存在が知られるのみであるが、数度にわたる日中の共同発掘調査によってこの池は人工的に造成されたものであり、池内には島が複数存在し、岸には護岸施設、州浜、貯水池、景石のほか、桟橋や釣殿などの水上建物があり、池岸上には回廊、臨池建物、井戸、道路など多岐にわたる建築物が設けられていたことが判明し、池周辺の景観を具体的に知ることができた。また、松林苑内の苑池にみられる州浜が唐由来の景観であることが、発掘調査であきらかになった。

さらに、関連する文献資料をみると、池内のハスの存在や池周辺の植生なども想像することが可能となる。このような成果からみれば、松林苑内の広大な空間にも池周辺に様々な人工物、建物があったことは想像に難くない。水上池北岸にとりつく半島先端の島をはじめ、ハジカミ池やメダマ池の周囲には瓦散布地があり、建物が存在した可能性は大いにあろう。例えば、水上池の西北方には、斉宮が存在した可能性も指摘されている[46]。今後は、池だけでなく臨池建物やその周辺の景観を知るための調査を期待したい。

内道場　大明宮北半部には、池のほかに多数の宮殿建物が林立していたが、なかでも、皇帝個人が参拝し儀式を行う内道場が複数存在していたことは特徴の一つである。唐代皇室の始祖を老子に結び付ける思想から、仏教よりも道教に重きをおいたことにより道観が目立つものの、発掘調査と文献資料双方から仏教の内道場の存在は確認できる。松林苑内は未だ調査が少なく宗教施設の有無は不明だが、大明宮北半部との共通性を念頭に置くならば、内道場としての仏教寺院が存在した可能性も考慮したうえで、今後の松林苑を検討していく必要があるだろう。

以上のように、大明宮北半部と松林苑との共通性を強調してきたが、相違点があるのは無論承知している。たとえば、大明宮とは異なり、松林苑の東辺、西辺の築地塀が平城宮の東面大垣、西面大垣と一致しない、松林苑の面積は大明宮北半より大きい、太液池と水上池の位置が異なるなど、違いを挙げればいくつもある。また、宮が位置する地形、思想的背景、伝統文化などの違いは大きく、平城宮造営時に唐文化のすべてをそのまま取り入れたなどというつもりはない。しかし、上記のように共通点を洗い出せば、その多さは無視できないであろう。日本ではじめての中国式都城である藤原京を造営した天皇や貴族たちが、造営半ばにして平城京への遷都を決断しなければならなかった理由は、大宝度の遣唐使がもたらした情報による唐の都との違いの大きさにあったといえよう。その影響は、天皇が住まう宮においても色濃く表れているはずである。本稿ではこれまであまり注目されてこなかった宮の後苑部分に焦点をあてて分析を加えてきた。しかし、これはあくまで仮説であり、この仮説を検証するために調査研究の視点が広がるきっかけになればと思い、ここに拙い私説を提示した次第である。

註

1　今井晃樹　2020「平城宮のモデルは唐長安城か？」『奈良の都、平城宮の謎を探る』　奈良文化財研究所。

2　河上邦彦　1990「第５章第４節」『松林苑跡Ⅰ』　奈良県立橿原考古学研究所。同　2002「あとがき」『飛鳥京跡苑池遺構調査概報』　学生社。

3　金子裕之　1996「平城宮の後苑と北池辺の新造営」『瑞垣』第175号。

4　『唐会要』巻30、大明宮。

5　『旧唐書』玄宗本紀。『旧唐書』憲宗本紀。

6　中国科学院考古研究所　1959『唐長安城大明宮』　科学出版社。

7　吉田歓　2018「日本の都城制―上閤門と閤門を通して―」『律令国家の理想と現実』　竹林舎

8　前掲注６報告。以下、麟徳殿の発掘成果はこの報告による。回廊については図示されておらず、文章のみで報告されている。

9　杜文玉・王麗梅　2015『隋唐長安』　三秦出版社。

10　前掲注９文献。

11　『旧唐書』巻199上、日本国。

12　『冊府元亀』巻110、代宗大暦３年。

13　前掲注９文献。

14　前掲注６報告。

15　何歳利　2003「大明宮太液池の予備調査と発掘調査研究」『東アジアの古代都城』　奈良文化財研究所。

16　今井晃樹ほか　2003「唐長安城大明宮太液池の共同発掘調査」『奈良文化財研究所紀要2003』、中国社会科学院考古研究所・日本独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所連合考古隊（以下、連合考古隊と略記）　2003「唐長安城大明宮太液池遺址発掘簡報」『考古』2003年第11期。

17　島田敏男　2004「唐長安城大明宮太液池の共同発掘調査」『奈良文化財研究所紀要2004』、連合考古隊　2003「唐長安城大明宮太液池遺址考古新収穫」『考古』2003年第11期。

18　今井晃樹　2005「唐長安城大明宮太液池の共同発掘調査」『奈良文化財研究所紀要2005』、連合考古隊　2004「西安唐大明宮太液池南岸遺址発現大型廊院建築遺存」『考古』2004年第９期。なお、連合考古隊　2005「西安市唐長安城大明宮太液池遺址」『考古』2005年第７期では2002～2004年の調査の概要をまとめてある。

19　今井晃樹　2006「唐大明宮太液池の調査と共同研究」『奈良文化財研究所紀要2006』、連合考古隊　2005「西安唐長安城大明宮太液池遺址的新発現」『考古』2005年第12期。

20　石製欄干の写真は注19今井2006の「巻頭図版１」に掲載した。

21　近年、発掘調査で確認された含元殿の南を東西に走る水路にあたると考えられる。中国社会科学院考古研究所西安唐城隊　2007「西安市唐大明宮含元殿遺址以南的考古新発現」『考古』2007年第９期。

22　史念海　1999「唐長安城的池沼与林園」『漢唐長安城与関中平原』（中国歴史地理論叢1999年12月増刊）。

23　前掲注６報告。

24　馬得志　1987「唐長安城発掘新収穫」『考古』1987年第４期。

25　何歳利　2018『唐長安城考古筆記』　陝西師範大学出版総社。

26　唐代の道観、内道場については、以下の２篇を参照した。土屋昌明　2007「長安道教の内道

場について」『長安都市文化と朝鮮・日本』汲古書院、米田健志　2014「唐代の内道場と内供奉僧について」『仏教がつなぐアジア―王権・信仰・美術―』　勉誠出版。

27　奈良県立橿原考古学研究所　1990「第３章第２節」『松林苑跡Ⅰ』。

28　岡見知紀　2012「松林苑採集遺物について」『青陵』第133号。

29　奈良県立橿原考古学研究所　1994「奈良市松林苑第40次・第41次発掘調査概報『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1993年度』。

30　奈良県立橿原考古学研究所　2016「松林苑第114次調査」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）2015年度』。

31　奈良県立橿原考古学研究所　1990「第３章第２節」『松林苑跡Ⅰ』。「修理」官および「修理司」は天平勝宝年間以降、神護景雲年間には存在が確認できる。

32　奈良県立橿原考古学研究所　1990「第５章第２節」『松林苑跡Ⅰ』。

33　奈良県立橿原考古学研究所　1990「第３章第４節」『松林苑跡Ⅰ』、奈良県立橿原考古学研究所　1997「奈良市平城宮松林苑第56～59次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1996年度』。

34　奈良県立橿原考古学研究所　1990「第５章第２節」『松林苑跡Ⅰ』。

35　奈良国立文化財研究所　1981『平城宮北辺地域発掘調査報告書』。

36　奈良県立橿原考古学研究所　1998「佐紀・盾列古墳群、松林苑発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1997年度』。

37　奈良県立橿原考古学研究所　2015「松林苑第113次調査」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）2014年度』。

38　内田和伸　2000「おっ、お代官様、水上池は庭園遺構で御座候」『奈良国立文化財研究所年報2000－Ⅲ』。

39　奈良県立橿原考古学研究所　1990「第２章第２節」『松林苑跡Ⅰ』。

40　金子裕之　2003「平城宮の園林とその源流」『東アジアの古代都城』　奈良文化財研究所。

41　森優子　2001「節禄の政治的意義について」『アジア文化史研究』第１号。

42　岸俊男　1988「難波の大蔵」『日本古代宮都の研究』　岩波書店。

43　江川式部　2005「唐代における賜酺と賜宴」『唐代史研究』第８号。

44　『延喜式』巻42・左右京職・京程によれば、宮城の基底部幅は７尺（宮垣半３尺５寸）である。同書巻34・木工寮・築垣で最も高い築垣（おそらく宮城築垣）は高１丈３尺であるから、これを平城宮造営尺の大尺＝0.355mで算出すると高さ4.62mとなる。しかし、松林苑築地塀の基底幅は10尺であるから７尺の1.43倍とすると、高さは6.60mとなる。やや高すぎる感もあるが、唐の宮城城壁の高さよりは低い。参考値として提示する。

45　『新唐書』地理志一・上都および『長安志』巻６宮城などには、宮城（太極宮）の城壁の高さは３丈５尺とある。唐尺＝0.294mで計算すると、３丈５尺は10.29mとなる。

46　前掲注３論文。

挿図出典

図１、２、５：筆者作成

図３：註６文献図21を改変トレース

図４：註19今井2006文献の図14を改変トレース